ウィリアム・ケイ著，新井郁男他訳『道徳教育の研究 ——社会・家庭・学校の役割』

細　川　幹　夫

目　　次

1．本書の構成
2．道徳性の発達に関する見方
3．若干のコメント

最近、青少年の登校拒否や自殺、あるいは家庭内暴力、学校内暴力、麻薬中毒、その他の犯罪や非行が、連日新聞紙上をにぎわしている。これ程、犯罪や非行の低年令化が問題になった時代はいままでに例がなかろう。重大な社会問題である。このような青少年の暴力や虚無的傾向の多発は日本だけではなく、アメリカ、イギリス、ドイツ、フランスなどの先進諸国に共通した現象である。この現象の背後にある原因の探索はここでの目的ではないが、そこには正しい道徳教育の不在が一因となっているであろう。

そうした観点から青少年の道徳性の発達に関する研究が、ユネスコをはじめ世界各国でにわかに高まってきた。もちろん日本も例外ではない。その中で、イギリスのノッチンガム教育大学のW・ケイ博士の著作『道徳教育：社

会・家庭・学校の社会学的研究』が欧米で非常な注目を集めている。わが国の学界でも注目を受け、昨年12月に東京工業大学の新井郁男氏らが翻訳し、『道徳教育の研究』として広文社から刊行された。この訳書の図書紹介はすでに教育開発研究所編『教職研修』(昭和58年3月号) で行ったが、ここではもう少し詳しく紹介してみたいとおもう。

1．本書の構成

まず最初に「主題と構成」が書かれ、本論は2部に分けられている。第1部は「道徳性の決定因としての社会階層」について論述され、第2部では「学校の道徳的影響力」がとりあげられている。その目次をとりあげると、つぎのとおりである。

まえがき
第1章　本書の主題と構成
第1部　道徳性の決定因としての社会階層
第2章　道徳性と社会階層
第3章　道徳的発達の基礎条件
第4章　基本的な道徳的特性の社会階層
第5章　道徳的判断の社会階層差
第6章　欲求充足の方向性
第7章　愛他性
第8章　道徳的柔軟性
第9章　道徳的積極性と創造性
第10章　中流階級的道徳への接近
第2部　学校の道徳的影響力
第11章　学校の役割
第12章　社会体系としての学校
第13章　学校組織のモデル

第14章　学校制度をめぐる諸思潮
第15章　総合制中等学校による道徳性の育成
第16章　学校の民主化と子どもの社会化
第17章　教師—生徒関係
第18章　道徳教育の諸問題
第19章　結び—道徳教育の課題
各章の要旨
参考文献

訳書には最後に「各章の要旨」がついているので、ここでは各章の要旨を割愛する。

まず最初に、著者W・ケイは第1章で本書を書いた目的に触れている。先進諸国では、道徳教育が学校のカリキュラムの中に確立されるべきことは、いまや自明の理になってきている。全世界的な文化的・道徳的危機は、学校で道徳教育の責任を分担すべき状況になってきた。がしかし、不幸にして、不適切な教材がますます多く出版され、それらが学校によって広められている。

そこでそのような教材の妥当性を評価したいと望む人びとを助けるために、また子どもの社会的環境の中にあって、その道徳的成長を助けたり妨げたりする要素を親や教師が確認するために、本書が書かれている。

第1部では「道徳性の決定因としての社会階層」がとりあげられているが、これは子どもの道徳性の発達に社会階層の影響が著しいこと、すなわち中流階層が道徳的に優れていることを指摘するためである。ただし、これは労働者階級の文化が中流階級の文化よりも劣っているというのではなくて、民主的な社会環境が子どもの道徳的発達を促進するのに最善の環境であることを言わんがためである。つまり道徳性発達の基礎はまず自律性の成長にあるので、道徳的自律性が育成される社会環境、親子関係、師弟関係が必要事項になってくるのである。

2．道徳性の発達に関する見方

道徳的発達の基礎条件　本書の題材は子どもの発達段階を追って配列してある。まず道徳的発達の基礎条件は道徳的成長が可能になるよりも前に確立されていなければならない。その基礎条件とは、同一性（Identity）、自己受容、同一化（Identification）、十分に形成された良心、成功と達成の経験などである。

同一性の感覚は個人が自律的になり得る以前に必要である。また自己受容は正しい道徳的判断を可能にする。同一化は範例的経験を促進する。この経験がなければ、子どもは幼児期の行為を規制することができないのである。また、十分に発達し啓発された良心は、そのような判断に内的な確認を与える。成功と達成の経験は、道徳性の強化のために自信を植えつける。

これらの基礎的条件の確立は、家族の中で行われる。したがって、家庭内での育児の仕方が子どものその後の発達にとってきわめて重大であり、また幼児期の家庭生活のあり方がその後の道徳的発達の強力な決定要因となるのである。

基本的な道徳的特性　道徳的行為における社会階層差を検討すると、五つの道徳的特性が道徳的成熟の特徴を表わすものとして浮び上ってくる。それらは(1)道徳的判断、(2)欲求充足の延期と未来志向、(3)道徳的愛他主義、(4)道徳的柔軟性、(5)道徳的積極性と創造性である。これらの特性は道徳的発達の基礎条件が確立されれば、経験的にも論理的にも必然的な帰結として出てくるものである。

まず道徳的判断が十分に発達していることは、道徳的決断がなされる前に必要なことである。この場合に、その行為者が未来志向的であり、欲求が一時延期されることを必要とする。さらに、道徳的決断において他者は常に必然的にそれに含まれざるをえない要素である。したがって、その状況に含まれざるをえない他者の幸福を常に考慮する愛他主義という特性が必要とされる。しかし、愛他主義も道徳的判断も、ともに道徳的決断に達するための

愛他的—理性的な要素であるが、道徳的原則に基礎づけられていなければならない。さらに道徳的柔軟性が必要となる。この道徳的柔軟性は、われわれの行為をコントロールするために出された法律的命令や権威主義的な押しつけなどの混じり合った道徳的要請の中から、道徳的原則を抽出することができるものである。しかし道徳的原則を抽出する能力は、これらの原則が日常生活で創造的に適用されるのでなければ、妥当なものとはいえない。したがって、道徳実践者は道徳的決断をする能力のみならず、特定の状況へ道徳的原則を適用する能力をも必要とする。

基本的な道徳的態度　ケイは『道徳的発達』(1968）において、道徳的に成熟した人間は自律的、理性的、愛他的であり、責任を果たすことができなければならないと論じている。

道徳的自律性が最も基本である。強制されて行うことを道徳的行為とみなすことはできない。自律的決断には理性の要求がある。それに従うならば、妥当な道徳的判断が保障されよう。さらに、道徳的決断には常に他者の幸福に対する配慮がもう一つの基本的要素として加えられる。他者への愛が、理性的決断を修正し、あるいは強化するために必要である。最後に、自律的、理性的、愛他的決断は、それにもとづいた行為がなされるまでは無力であるから、この決断をした当人は、それにもとづいて行為しなければならない。

理性と愛他性は道徳性にとって基本的なものであるから、全く新しい心理的特性である〈理性—愛他性〉がいまや道徳性の研究に現われつつあるといえよう。しかし、これらは特別の心理的特性ではない。いわば単一の中心的心理構造の異なる側面である。

学校の影響　家族と社会とが個々の子どもの道徳的発達にいかに影響を及ぼすかを示す証拠を提示したあとで、さらに社会体系としての学校の影響が検討されている。ケイによれば、民主的な環境が道徳的特性や態度が出現するための必須の条件である。したがって理想的な学校には、あらゆる形態のエリート主義が排除され、方針決定に教師と生徒の両者を参加させる親和的な組織が必要であるとされる。そのような理想的なシステムは理想的な総合

制学校においてのみ作動しうる、と結論づけている。

道徳教育と社会的安定性　最後に、道徳教育は社会の病理的現象だけに効能をあらわす薬だとして意図されているのではないことが強調されなければならない。たとえば、1973年の初めにイギリス高等法院王座部首席裁判官は、もし現在の犯罪の傾向が続けば、文明そのものが危険にさらされるような上昇率に達することもありうる。そして、法廷はそれに伴うぼう大な仕事を処理しきれなくなって、法と秩序が全面的に崩壊するといったことにもなりかねない、と言明した。これは多くの人びとが恐れていることである。最近の「法と秩序」論争は事態の深刻さを印象づける。実際にも非常に深刻になっていて、1973年3月ニクソン大統領は犯罪に対して大がかりな攻撃をかける計画を明らかにした。さらに、暴力は今や学校にはいり込みつつあって、堕落したティーンエイジャーを規制し、教育しようとする教師たちの努力を無にしてしまうことにもなりかねない。このことだけでも、なんらかの形態の必須の道徳教育が緊急に必要とされていることは明らかである。

これは消極的な側面である。これを考えて道徳教育の必要を説く人びとを見くびることはない。積極的な側面もある。道徳教育は犯罪と社会的無秩序を除去するだけではなく、現代文化のすばらしい所産を十分に享受できる人びとを育てることもしなければならないのである。

3．若干のコメント

W. ケイの著作は道徳教育に関するしっかりした総合的、理論的基礎をもち、しかも実証的な証拠をもっているところに説得力がある。彼の理論では、中心軸に合理的―愛他的（rational-altruistic）の基準が設定されているが、これはこれまでの道徳理論がどちらかといえば合理的な側面だけ強調されてきたのと違って、愛他性の側面がとりあげられている点で注目されてよい。こうした視点はすでにペックとハヴィガーストなどの研究でとりあげられていたし、広池千九郎の「正義と慈悲の調和」ということにも対応しているといえよう。

W. ケイはイギリスのエリート教育を担うパブリック・スクールの教育をあまり評価せず、むしろ非エリート的な総合制中学校を評価し、ここを理想的な民主的社会環境とみなしている。この評価についてはおそらく異論があるのではなかろうか。というのは総合制学校には多くの労働者階級の子弟が学んでいるであろう。その場合に、理想的な民主的環境と中流階級的文化がどの程度確保しえるかについての見通しが不詳である。

なお本書は欧米の研究者や教育者、父兄を念頭にして書かれたものであるので、文献にはイギリス、アメリカ、ドイツ、フランスのものが多い。しかし、その中に日本人のものが一冊含められている。それは広池千九郎著『モラロジーと最高道徳の特質』（1966年英訳版）である。第18章「宗教と道徳」の項でとりあげられ、つぎのような注がついている。

Hiroike (1966) has built a system of 'supreme morality' on a synthetic structure erected with the central teachings of the major world religions. This is the most potent moral force in contemporary Japan.

稀にみる博識、篤学のW. ケイ博士は1977年12月に逝去している。まだ若い前途有望な学者であったが、彼を失ったことはかえすがえすも残念である。博士のご冥福を祈りながら筆を擱く。

（ウィリアム・ケイ著、新井郁男他訳『道徳教育の研究――社会・家庭・学校の役割』、広文社、昭和47年12月発行、全431頁）